アラビア語文学のジェフリー・チョーサーへの影響
「修道女付き司祭の話」と『カリーラとディムナ』に見る寓話解釈の比較考察

東中巴奈

1. はじめに

『カンタベリー物語』の一節「修道女付き司祭の話」は、貧しい農場で飼われる雄鶏チャンテクレールと、彼を狙う狐との駆け引きを描いた寓話である。従来、同作は『狐物語』やマリー・ド・フランスの『寓話』など、西洋中世の動物譚との関連性が指摘されてきた。これらは成立年代や文化的背景から、ジェフリー・チョーサーが接触し得たとされる「ハード・アナローグ」として位置づけられるが、それだけでは説明しきれない特徴も同作には複数存在する。こうした要素に対しては、作品間に見られる描写や内容の類似を手がかりに、当時の文化圏に共有されていた思想や社会的・文化的関心を読み解く「ソフト・アナローグ」の観点からのアプローチが有効である(Farrell 350–51)。とりわけ、「修道女付き司祭の話」の描写において、アラビア語文学との内容的共通性が注目される。12 世紀ヨーロッパにおけるアラビア語文献の翻訳活動、近年指摘されるイスラム文化のヨーロッパにおける継承、そしてチョーサーによるアラビア科学を典拠とした科学文献の執筆を踏まえると、こうした比較は十分に意義を持つ。本発表では、「ソフト・アナローグ」の視点から「修道女付き司祭の話」と 8 世紀にイブン・アル＝ムカッファによってアラビア語に翻訳・改変された寓話集『カリーラとディムナ』に登場する王ライオンと二匹のジャッカルの兄弟に関する物語との間に見られる共通点を明らかにすることで、「修道女付き司祭の話」をアラビア語文学の伝統とも接続しうるクロスカルチュラルな物語として再評価し、文学テクストのレベルでイスラム圏との文化的接点を再検討することを試みる。

2. 比較考察

チョーサーの「修道女付き司祭の話」は、ハード・アナローグとされる『狐物語』や『寓話』を基盤として、複数の要素が重層的に組み合わされた作品として再構成されているが、従来の参照文献だけでは捉えきれない４つの描写が随所に見られる。

第一に、『カリーラとディムナ』では、王の運命が助言者の言葉によって左右されるという構図が繰り返し描かれる。特にディムナは、自らの助言を医学的比喩に準え、「王は患者であり、助言者は治療を施す医師である」と語る(Ibn al-Muqaffa 4.57)。助言それ自体が「薬」として捉えられ、助言と薬のイコール関係が描かれている。この構図は「修道女付き司祭の話」にも共鳴する。物語で描かれる鶏たちが暮らす庭は“enclosed”された象徴的空間として描かれ(Chaucer l. 2847)、チャンテクレールはその内部で“in his governounce”にある存在として提示される(Chaucer l. 2865)。その際に、統治者チャンテクレールの判断を支えるのは、最も身近な存在である雌鶏ペルテローテである。彼女はチャンテクレールの不吉な夢に対して、体液説に基づく医学的解釈を与え、薬草の知識を用いて不安の解消を試みる。同時に、彼女は「夢を気にする必要はない」という助言も並行して与える(Chaucer l. 2941)。実際に、彼女の言葉が“counseil” と明示される点から(Chaucer l. 3253)、彼女が助言を与えるアドバイザーであることが示唆されている。薬草と助言はいずれもチャンテクレールの不安を取り除く手段として機能しており、『カリーラとディムナ』と同様に助言と薬の等価関係が修道女付き司祭の話」でも成立している。

第二に、動物たちがそれぞれの立場から、権威や他の物語を引用しつつ、議論を交わす点である。『カリーラとディムナ』では、動物たちが知識を駆使して議論を繰り広げる。たとえば、ライオンの母が、ディムナによる策略を王に明かさなかった理由を語る場面では、彼女は預言者ムハンマドの言行（ハディース）や、イスラーム法学者（ウラマー）の意見を引用して、自らの判断の正当性を主張する。それに対して王ライオンも、同様にウラマーの教えを持ち出して反論し、親子の間で権威を用いた議論が繰り広げられる。ここでは、物語の中の登場人物が権威による言葉を議論の論拠として利用している点が注目される。

「修道女付き司祭の話」でも同様の構造が見られる。チャンテクレールとペルテローテという雄鶏と雌鶏が、予知夢の真偽について議論する場面では、ペルテローテが「夢は現実にならない」と主張し、権威カトーの言葉をその根拠として挙げる。これに対してチャンテクレールは、権威に由来する夢が実際に現実になった事例を二つ語り、反論する。このように、両者がそれぞれ権威ある人物や物語を持ち出しながら、自らの立場を強化し、議論する点が特徴的である。『狐物語』では、物語や権威の引用は、語り手である狐が説教者のふりをして一方的に語るかたちで用いられる。たとえば、狐がチャンテクレールに宗教的な例話を語る場面でも、聞き手であるチャンテクレールがそれに反論したり、議論を展開したりすることはない。したがって、『狐物語』における引用は、一方向的な語りの手法にとどまっている。

第三に、動物に生じる出来事に神学的な「予定説」の概念が適用されている点に注目すると、チョーサーの

「修道女付き司祭の話」に見られるチャンテクレールの運命の捉え方と、アラビア文学『カリーラとディムナ』におけるディムナの語りとのあいだに興味深い共通性が浮かび上がる。『カリーラとディムナ』では、王ライオンに重用され平穏な日々を送っていたディムナが裏切りを暴かれ、兄カリーラからも見放されて没落するという場面で、自らの不幸を嘆きつつ *maqādīr* という語を用いる。この語は「神が定めた運命」を意味し、その語根 *qadara* は、イスラム教の予定説（*al-Qaḍā' wa-l-Qadr*）と深く関わっている。クルアーン第 54 章 49 節に「まことに、われらはすべてのものを定めによって創造した」とあるように、神の意志は人間に限らずすべての被造物に及ぶとされ、神が動物の生涯も含めてその全過程を知っていると述べている。したがって、ディムナという動物の転落が神の定めと結びつけられていることは、イスラム神学の枠組みにおいて理解可能なものであると言える。

一方、「修道女付き司祭の話」でも、チャンテクレールが夢で狐に襲われる予兆を見た後、実際に狐が現れて災難が現実となる展開が描かれる。この夢の実現は、「神が予知したことは必ず起こらなければならない」という語りによって予定説的に解釈され、チャンテクレールの経験もまた、神の意志のもとで進行しているかのように語られる。キリスト教における予定説は本来、人間の救済をめぐる教義であり、動物に適用されることは通常想定されない。しかし、両作品に共通して見られるのは、動物が平穏な日常から、抗いがたい力によって突如として災難へと引きずり落とされるという運命の不可避性であり、この転落の構造を「神の定め」という神学的枠組みで内包することで、予定説が物語世界に組み込まれている点にある。

最後に注目したいのは、両作品に共通する寓話の「二重性」と、それをどう読むべきかという明確な読み方の指示が示されている点である。「修道女付き司祭の話」では、物語が賢人には「知恵」として、教養のない者には「娯楽」として受け取られるという考え方が見られるが、これは『カリーラとディムナ』の序章でもイブン・アル＝ムカッファによって示されている。ここでは、物語は読み手の理解力によって、表面的な楽しみから深い教訓まで、多様な意味を持ちうると説明されている。

特に「修道女付き司祭の話」の末尾に登場する殻と実を用いたの比喩「殻を割って中の実を取り出しなさい」は、多層的な読み方を暗示している(Chaucer l. 3443)。これは、物語の表面ではなく、その内に秘められた教訓に目を向けるよう促すものである。このような姿勢は、13 世紀のイスラームの神秘主義詩人 Rūmī や、『カリーラとディムナ』においても同様に見られる。特に『カリーラとディムナ』では、物語の理解にあたって、ナッツの殻を割って中の実を取り出すべきだという比喩が用いられ、教訓を取り出すことの重要性が物語理解の中心に据えられている。

アラン・ドリールやウォルター・オブ・イングランドの著作にも、物語の背後にある意味を読み取ろうとする姿勢は見られるが、物語全体に多層的な読解の枠組みをあらかじめ組み込み、読者に対してその読み方を明確に指示している点において、「修道女付き司祭の話」と『カリーラとディムナ』の共通性が際立って見えると言える。

3. 結び

以上の点から、「修道女付き司祭の話」は、西洋中世文学の枠を超えて、アラビア語文学、とりわけ『カリーラとディムナ』との内容的な関連性が明らかとなった。王と助言者という構図、権威を媒介とする動物の語り、神学的予定説に基づく動物の運命解釈、そして多層的な読解を可能にする寓話的構造といった要素において、両作品は重要な共通点を有している。こうしたモチーフの類似は、直接的な影響とは断定できないものの、ソフト・アナローグの観点から見れば、両者の接点を読み解く有効な手がかりとなる。実際、ペトルス・アルフォンシの『知恵の教え』のように、『カリーラとディムナ』の系譜に連なる東方起源の作品が、チョーサーやボッカチオらに知られていたことは文献的にも確認されており、14 世紀ヨーロッパ文学がイスラーム世界の知的伝統と間接的に接していた可能性を示している。こうした視点は、チョーサー作品に潜在する異文化的接点を再考する契機となり、中世における文化交流の実相を捉え直す上で有意義な手がかりを提供するだろう。

Work Cited

Al-Muqaffaʿ, Ibn . *Kalilah and Dimnah: Fables of Virtue and Vice*. Translated by Michael Fishbein, New York University Press, 2021.

Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. Edited by Larry D. Benson, 3rd ed., Oxford, Oxford University Press, 2008, p. 7.

Farrell, Thomas J. "Source or Hard Analogue? Decameron X, 10 and the Clerk's Tale." The Chaucer Review 37.4 (2003): 346-364.

Habib, M.A.R, and Bruce B Lawrence. *The Qur'an: A Verse Translation*. Liveright Publishing, 13 Feb. 2024.